

アイデア創出過程の違いが集団の創造的活動に及ぼす影響

今村 夕貴

現在、産業活動や研究活動において、集団による創造性が求められることが多い。この集団の創造性に対する実験的アプローチとしてブレインストーミング研究が数多く行われてきた。しかし、ブレインストーミング研究の問題点として、アイデアの創造性の質的な評価基準が研究によって異なるため、一貫した研究結果が得られていないことが挙げられる(Diehl et al, 1987)。したがって、本研究では、現実の産業活動において求められるような創造性のみに焦点を当て、集団と個人の創造性についての研究を行なうことを目的とし、実験による検討を行なった。

本研究では、「新奇性と妥当性の両方を有する」アイデアが創造性の高いアイデアであると定義し、その創造性の評価基準として、「実現可能性」、「独創性」、「有効性」の3点を設定した。また本実験では、Graham(1977)で使用された、集団もしくは個人でアイデア創出を行なった後に、合議によって集団で最もよい案の選択を行なわせるという課題について、討議集団条件と名義集団条件における差を検討した。

アイデア選択については、集団極性化や集団的浅慮が生じることにより、討議集団条件と名義集団条件の両方において、第三者評定による最もよい案を正しく選択できないと仮説を立てた。また、特に名義集団条件では、アイデア創出を個人で行なうことから、共有情報バイアスによって、第三者評定によるアイデアの最高得点と選択されたアイデアの創造性得点の差は、討議集団条件が名義集団条件より小さくなるとの仮説を立てた。アイデアの創造性については、実験に参加していない第三者に評定を行なわせ、その評定結果をアイデアの創造性の質の指標とした。

結果、創出したアイデアの最高得点は名義集団条件が討議集団条件よりも有意に高かったが、アイデアの最低得点は名義集団条件の方が討議集団条件よりも有意に低く、アイデア全体の平均得点は集団条件間に差が認められなかった。したがって、個人でアイデア創出を行なう場合は、集団で行なう場合に比べて創出されるアイデアの創造性の範囲が大きいため、より創造性の高いアイデアを創出できていると考えられる。また、アイデア選択については、両集団条件とも、班のアイデアの最高得点は選択されたアイデアの創造性得点より有意に高かった。また、班のアイデアの最高得点と選択されたアイデアの創造性得点の差についても、集団条件間に差が認められなかった。したがって、創出アイデアの中から最もよいアイデアを選択するという課題においては、集団条件間でパフォーマンスに差はなく、アイデア創出方法の違いはその後のアイデア選択のパフォーマンスに影響を与えないことが示唆された。また、アイデアの量と質について集団条件ごとに検討したところ、創出されるアイデアの量はアイデアの質と関連しないことが示唆された。

したがって、本研究の結果から、集団での創造的活動はアイデア創出において高いパフォーマンスを示さないだけでなく、アイデア選択においてはその創出されたアイデアの中で最もよい案を選択することもできていないことが示され、最終的なパフォーマンスは集団の潜在的な創造性と比較して大きなロスがあることが示唆された。(社会心理学)